

プレゼンテーション1

小倉昭和館の再建

樋口智巳 | 「小倉昭和館株式会社」代表取締役・館主

「小倉昭和館」は、2022年8月10日の旦過市場の大火災により、創業83年の記念日を前に消失してしまいました。いまは劇場がないのですが、今年12月に再建をしようとしています。昭和館はもともと芝居小屋兼映画館として運営していて、市内に姉妹館を3つ持っていました。1960年代の北九州市には113館の映画館がありましたが、シネコン以外は当館だけになり、それも焼けてしまいました。20年来の赤字続きの映画館だったこともあって当初は、再建は考えられませんでした。それに昭和館は賃貸で家主さんに家賃を払っていました。ですから最終的な判断は家主さんがされるわけです。火災の後、4日目にリリー・フランキーさんが来てくださり、「再建しましょう。クラウドファンディングをやりましょう」と言われました。クラウドファンディングをやるうにもプレゼンの資料も十分に作れない、無理ですとお答えしたのですが、それでもなお、やりましょうと言ってくださいました。それに加えて新聞やテレビ、マスコミが、この場所にはこの映画館が必要だとアピールしてくださって、家主さんが「映画館を建てないわけにはいかないね」と言われて、建てていただけることになりました。再建を決めて、親会社からは独立して「小倉昭和館株式会社」を立ち上げました。社員は私と息子です。建物は大家さんに建てていただきますが、映画館の空調機器や映写機材、客席シート…すべてを小倉昭和館で賄わねばなりません。コロナ禍で、映画館が閉館していく中で、なぜやるのかと言われますが、全国から1万7000筆を超える「北九州市に小倉昭和館の再建支援を求める」署名をいただき、こんなに多くの方々が求めてくださっているのだからと、とにかく走り出しました。いまは、息子と二人で開設準備を進めていて、毎日ボランティアの方々にも来ていただいています。

「まちの映画館」をつくる

リリー・フランキーさんがクラウドファンディングの応援団長になってくださって、こんな言葉を寄せてくださいました。

度重なる火災で焼失したものは、生活や、思い出、そして、未来でした。

自宅にいても手軽に映画と接触できる今。でも、映画と僕たちの関係は、知識だけでは成り立ちません。映画を求めて、時間やお小遣いを切り詰めて、そこに赴いた経験。その経験こそが、僕たちの感受性を培ってきくれました。

今回、焼失した小倉昭和館を皆様にお伝えしたのは、観客の少ない家族経営の三番館を再度作る為ではありません。

町の映画館という場所が、改めて、子供たち、大人たちの語らいの居場所でありますよう。そこに行けば、年齢、性別、人種に関係なく、食事をしながら、今観た映画、いつかの人生をささやき合えますよう。

映画、映画館を媒介に、すべての人が集える、とまり木になれば。

それは、懐古的な想いではなく、文化という、人々の未来の為に。

リリー・フランキー

クラウドファンディングでは、4000万円を超えるご支援をいただくことができました。

建設中の昭和館は134席で以前よりも小さな映画館になりますが、受付を奥の劇場の入口のそばに設置し、ロビーをパブリックスペースにしました。映画をご覧になる方だけでなく、いろいろな方に立ち寄っていただける場所にしたいと思いました。昭和館の周りの且過市場の方々はまだ復活できていません。お店を持ってなくなった方もいらっしゃいます。そういう方々が立ち寄れる場所になればと思います。4月の火事の際には昭和館は焼けなかったので2週間営業を休んで、警察や消防の人たちが手を洗ったり、介抱していただいたりする場所として使っていただきました。2回目の8月の火事の際は手を洗う場所、集まる場所もなくなり、「居場所」が必要だと切実に感じました。座席数を少し減らしても、人が立ち寄れる場所をつくりたい、映画館の入り口を映画への入り口にしたいと思いました。

皆さんとつくる、皆さんの映画館

「小倉昭和館」は、祖父が何も無いところからつくり、父が、映画が斜陽産業となって赤字を出しても、人に頼らず、歴史に支えられた映画館でした。けれど、これからは人々の思いに支えられ、一緒につくっていただく映画館です。新しい映画館名を決める際も、皆さんにご相談をしたところ、2000人の方が投票してくださり、思い出や思いを書いてくださる映画館です。これまでの昭和館は樋口家が三代で守ってきたプライドもありましたが、新しい昭和館は、皆さんとつくる、皆さんの映画館にしたいのです。皆さんが参加してくださる映画館、そういう映画館を目指していきたいと思っています。

メディアの方々にも協力していただいています。宣伝広告費はありませんが、イベントをやる際には主要全紙が書いてくださいます。焼けて何もかもなくなったと思っていたとき、西日本新聞さんが『復活の夢と一緒に—小倉昭和館の軌跡—』という冊子をつくって6000部も印刷していただきました。「あなたの12年はなくなっていない、こういうことをいままでやってきた映画館なんだよ」と書いてくれました。この冊子の完成に合わせて義援金のための口座を作りました。この会場にも、クラウドファンディングにご協力いただいた方がいらっしゃるといいます。ありがとうございます。11月末には文藝春秋社から『映画館を再生します。小倉昭和館、火災から復活までの477日』という本が出版されます。火災から一週間もしないうちに文藝春秋社の担当の方がいらっしゃって、本を出しましょうと言ってくださいました。

12月に再建をしても、運営はそう簡単にはいかないと思いますが、いつ来てもワクワク楽しい場所と思ってもらえるような場所にしていきたいと思っています。

北條

小倉昭和館の再生がマスコミを巻き込み、多くの方々からのクラウドファンディングが集まっています。小倉昭和館が、小倉という町、地域の文化資源として、まちづくりの中に十分に生きているのではないかと思います。

昔の昭和館と新しい小倉昭和館

